

A Reprint of Kanadehon Chushingura

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高木, 元 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6163

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



魯文の『忠臣蔵』

高 木 元

【キーワード】 仮名垣魯文、鈍亭魯文、仮名手本忠臣蔵、合巻、正本写

仮名垣魯文は幕末から維新期にかけて活躍した十九世紀後半を代表する戯作者である。しかし、遺された仕事は実に多岐にわたり、現在までに全貌が明らかにされたとは言いがたい。

とりわけ、魯文が得意とした「抄録」という方法は、非創造的で安易な営為として否定的に捉えられてきた。しかし、長編作を簡潔に紹介するには、それなりの学識と才能とが不可欠であった。

『南総里見八犬伝』を抄出した切附本（末期中本型読本）『英名八犬士』全八編（安政二～四年）は、ほぼ原文の切り貼りだけで作製されている。その文章の繋ぎ方を丁寧に観察するに、非常に良く工夫されていることが分る。原本を脇に置いて書き抜きつつ執筆をしたのであろうが、たとえコピーアンドペーストが可能ならワープロを以てしても、原文を活かしつつ極力リライトせずに文章を短くするのは、容易には做し得ない作業である。

一方、合巻『當世八犬傳』（安政三年）は、名場面を繋ぐ形式に抛り、僅か十丁で八犬伝を紹介している。長編の読本抄録合巻である『仮名読八犬伝』のうち二八～三一編（慶応元～明治元年）も手掛けているし、さらに艶本『佐勢身八開傳』（安政三年）も実に巧妙な改作となっている。

魯文の『忠臣蔵』

また、犬士達を描いた錦絵の填詞なども執筆しており、『八犬伝』全一〇六冊という長編読本を自家薬籠中のものとしていた。各ジャンルに相応しい文体や記述方法を選び、限られた分量で纏めるのは至難の業であったはずである。

さて、此処では『仮名手本忠臣蔵』（以下『忠臣蔵』と略す）に関する魯文の抄録作について見てみたい。周知の通り『忠臣蔵』は繰り返し上演された演目であり、台詞等を含めて様式的に定型化した芝居であった。役者似顔で描かれた華やかな錦絵や、舞台を彷彿とさせる合巻（正本写）が出されていた。また、多くの戯作に於いてパロディ化され、実際の上演には基づかない見立てに抛る錦絵も大量に流布していた。此等のことから明らかであるように、『忠臣蔵』は誰でも知っていた有名な芝居である。しかし、浄瑠璃や歌舞伎を実見したり、浄瑠璃本（丸本）などを読んでいた人は限られていたと推測され、多くの人々は出版され続けた抄録本や各段通しの揃物錦絵などから情報を得ていたものと思われる。

魯文が関わった合巻としては『仮名手本忠臣蔵』（三編各編二冊、慶応三年刊、歌川国輝画、栄久堂板）が知られているが、これも前年の八

月に市村座での歌舞伎上演に即して出された〈正本写〉である。序文を引く。

忠臣蔵清書雙紙序

趣向ありと雖著述せざれば、其流行をしらずとハ、譬ハ脚色の目に見えず、彫バ賣れて顕るゝ、例を爰に假名手本、出雲が筆の跡を慕ひ、戯作の道に寺入して、稍く稿脱清書双紙ハ、自己が手習傍輩なる文里といへる滑稽者、しれた、魯鈍の兄弟子が、お師匠さんの名代に、梅と松葉の朱書を添て、一段見事よろしくと、讚ことぶきて校合おわんぬ。

慶應三卯孟春

假名垣魯文誌

この序で「傍輩なる文里」と記し、巻末には「菊亭文里譚」とあるが、表紙と見返には「魯文譚」「魯文録」とあるので、他でも用いている「菊亭文里」は魯文の別号と考えて差し支えないだろう。いづれにしても、典型的な『忠臣蔵』の正本写を手掛けていた事になる。

なお、佐藤悟編『正本写合巻年表』に拠れば、明治十一年にも松邨漁夫（仮名垣熊太郎）という戯名で、新富座の上演に基づく正本写『假名手本忠臣蔵』を出している。

ところで、正本写ではない魯文作『假名手本忠臣蔵』（二巻二冊）という合巻がある。切付表紙を持つ実に粗末な仕立である。前述の『當世八犬傳』は序末に「安政三辰夏」一昼夜急案「魯文戯誌」と、巻末に「鈍亭魯文填詞」一松齋芳宗画「日本橋新右エ門丁」糸屋庄兵衛板」とあり、粗末な仕立でも良く似ている上に、画工も同じである。本作には改印もなく板元も記されていないが、「鈍亭」は安政期に使

用していた戯号なので、安政三年頃出来の糸庄板かもしれない。寡聞にして他本の存在を聞かないので、架蔵本は保存状態も悪く破損部もあるが、此処に紹介して大方の御教示を俟ちたい。

注

- 1 高木元「魯文の売文業」〔国文学研究資料館紀要〕第三四号、国文学研究資料館、二〇〇八年）参照
- 2 高木元「英名八犬士——解題と翻刻——」（二）（五）〔人文研究〕第三四、三六、三九号、千葉大学文学部、二〇〇五、一〇年）参照
- 3 高木元「當世八犬傳——解題と翻刻——」（人文研究）第四〇号、千葉大学文学部、二〇一一年）参照
- 4 高木元「魯文の艶本」〔国文学研究資料館紀要〕第三五号、国文学研究資料館、二〇〇九）参照
- 5 佐藤悟編『正本写合巻年表』（国立劇場『正本写合巻集』別冊、二〇一一年）

【書誌】

- 外題 假名手本忠臣蔵
書型 中本（一七・五×一・一・四種）
構成 上下二巻二冊（各六丁）
表紙 錦絵風摺付表紙（切付表紙）
外題 （上）「假名手本忠臣蔵」「一松齋芳宗画」
見返 （下）「一松齋芳宗画」
記載なし（表紙裏側）
序 「大序」鈍亭魯文急記
改印 なし
板心 「一（十二）」（丁付のみ）
作者 「鈍亭魯文記」（十二ウ）
画工 「一松齋芳宗画」（十二ウ）

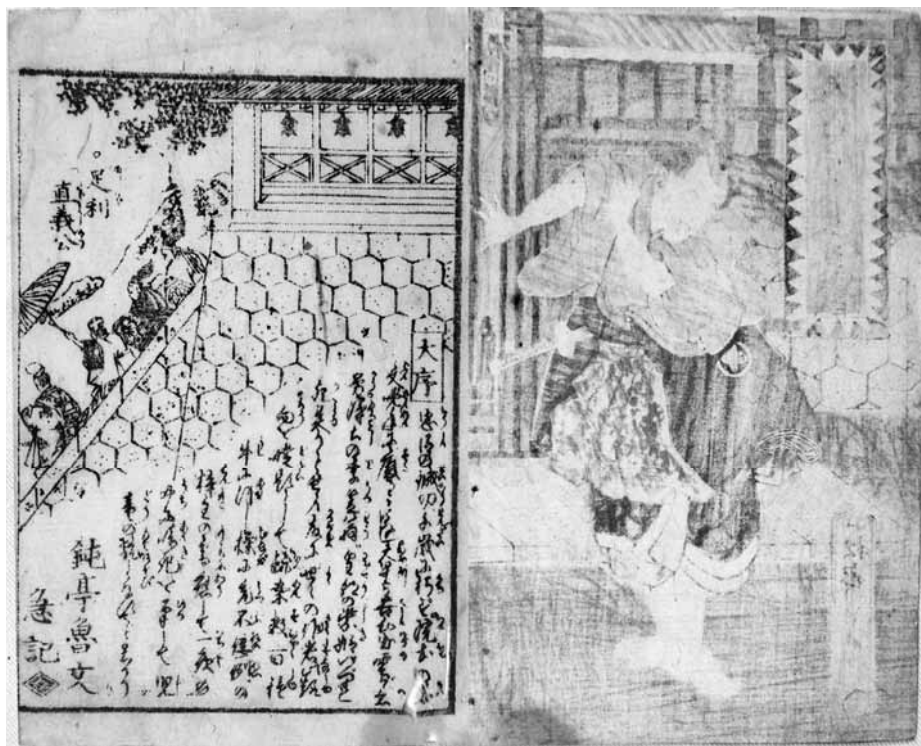
丁数 全十二丁
板元 記載なし
底本 架蔵本
諸本 所在未詳
備考 本来、合巻は五丁一冊の規格であるが、『假名手本忠臣蔵』は十二段までであるので、六段目を上冊末と下冊冒頭の二図に分け、各六丁宛、全十二丁仕立とし、変則的な構成に成っている。

【凡例】

- 一、可能な限り底本の表記を忠実に翻刻した。
- 一、本文に適宜漢字を宛て、原文を振仮名として保存した。
- 一、助詞に限り「ハ」と記されたものは、そのまま「ハ」とした。
- 一、句読点是用いられていないが、私意により付した。
- 一、本文中の会話などの部分には適宜「」を補った。
- 一、底本の破損等で読みかねる部分は「」で示し、推読した場合も「」に入れた。
- 一、丁移りは「^オ」のごとく示した。
- 一、掛詞は《》に入れて左ルビとして示した。
- 一、底本は、現在知り得た唯一の伝本である架蔵本に拠り、全丁を図版で示した。



表紙



大序

表紙裏

大序 忠臣の誠功、千歳に朽ず。院本の「名」文、晩年に麿るゝことなし。大星が苦心、出雲が意勞。漢土の李笠翁、皇朝の紫姬、いづれ坎吳かとせん。故に世々の作者、此趣向を礎題として、翻案数百種。牛に汗し棟に充。不佞例の梓主の需應して一夜の中に暗記を筆して兒童の玩となすことしかり。

○足利直義公

鈍亭魯文急記



初段

初段 ○鎌倉鶴岡八幡宮の社内（にて、尊氏さまの弟）義直、新田
 義貞が兜を出し、塩冶判官の奥方加保と御前を召し、「兜」の鑑定
 を乞ひ給ふ。加保与ハ元義貞の妻、匂当の内侍に宮仕の身にて在し
 かバ、義貞が兜を其場に於て鑑定す。「多つじかう」師直ハ「加保与
 に」兼て恋慕の心あるにぞ、良き折と文取出し、掻き口説く折しも、
 判官の要役桃井若狭介、加保与が難儀を救ふにぞ、師直これを遣恨
 に思ひ、若狭介を様々に悪口しければ、若狭介堪へかね「既に斯よ」
 と心得けるが、思ひ直して此場ハ其俣立別れて出仕けり。

高武蔵守師直

桃井若狭介

加保与御前



二段目 ○桃井若狭介ハ鶴岡にて師直が為に恥しめられ、無念遣方無く、今度都より勅使下向の饗応の役目を「仰」せられ、明日ハ殿中にて師直に行会ひなハ、「重なる遺恨、只一討」と、覚悟を究め、「このよしを家老加古川本蔵に打ち明し、後々の事頼み聞えければ、本蔵是をさらに諫めず。思ひ詰たる武士の意地、「明日ハ師直をすつぱりと遊ばせ」とて、庭の松枝を切「落」して心を励ましければ、若狭介勇み喜び「今日を限りの命なれば余所ながら奥方」家中の者へも暇乞ひせんもの」と、奥を指て入りければ、本蔵ハ跡見送り、金銀巻物用意して、其俣早馬に打乗り、師直が方に到るに、「師直早出仕せし」と聞て大手へ馳付け、師直に金銀巻物を以て賄賂し、主人の身上方端の指図を頼み聞えければ、欲に目の無き師直喜びて承引ける。」³



三段目

三段目 ○桃井若狭介ハ殿中にて師直に行会ひ「只一討」と思ひしに、
 何時ぞやとうつて変り、師直、若狭介が前に平伏して、先頃の無礼を
 詫び様々追跪 啓白しけれハ、若狭介案に相違し拍子抜して茫然と
 殿中深く入にけり。斯とも知ず塩冶判官、文箱携へ出来り。師直に
 奥加保与よりの文と差出せば、師直取て中打開くに
 然なきだに重きが上の小夜衣 我夫ならぬ棲な重ねぞ
 と一首の心に、師直ハ心中怒る恋の意趣。判官が出仕の遅きを様々
 罵しり、然のみならず扇を以て苛みつ、悪口雑言「愚弄に」
 判官堪らず、小脇差抜く手も見せず、師直が真向目掛けて斬付れバ
 「スハ喧嘩よ」と大小小名上を下へと騒動するに、加古川本蔵ハ先刻よ
 り衝立の影に身を潜み、此場の様子を窺ひいしが、走出で、判官を
 後より抱留める。其間に師直額を抱へほうく館へ逃帰る。又、
 判官ハ殿中も弁へ無く刃傷に及びし。此咎めにて、網乗物に乗せ
 られて、迫ての沙汰と返されける。」^{4オ}



四段目

四段目 ○塩冶判官ハ扇谷の下屋敷に押込まれ、足利家の沙汰を待
 に、石堂右馬之丞、薬師寺次郎左衛門の兩人検視として入来れば、
 兼て覚悟の判官ハ諸肌脱ハ下にハ白無垢、必死を究る腹切支度、
 用意の短刀九寸五分、腹深き(に)立て引回す。一家中の面々ハ主人
 の臨終に对面を乞と許さぬ掟の法令。斯る折しも塩冶の家老大星
 由良之助本国より馳来たり、主人の無念を推量して申した「れ」「我
 九寸五分、染し血潮を拭はずに、聽て此にて敵の首討て怨を晴さん」
 と言に言れぬ檢使の前、主と家来の胸と胸、言ず語らぬ大望宿志。
 判官儂く息絶れば、薬師寺ハ屋敷の受取、一家中の面々ハ由良之介
 を始めとして思ひく出去けり。」



五段目

五段目 ○塩冶の近臣早野勘平ハ腰元お軽が色香に惹れ、主人の大事に在合さず、お軽が在所山崎に落行き、狩人と成りて暮しけるが、今宵猪を撃止めんと鉄炮携へ大雨に火繩を湿し旅人に火を乞ながら、提灯の明りに見交す顔と顔。古朋輩の千崎弥五郎、此度の大事主君の石塔料の金整へ、お詫の「て 大ほ」取成し頼むと、別る、道にて「猪ぞ」と思ひ旅人を二ツ玉にて殺めつ。葉を探ぬる懐中より思わず取出す五十両。「お詫の種」と千崎が後追掛て渡しつ、我家へとそハ帰りけれ。

○斧定九郎与一兵衛を殺して五十両の金を奪ひ、其身又、勘平に撃る。

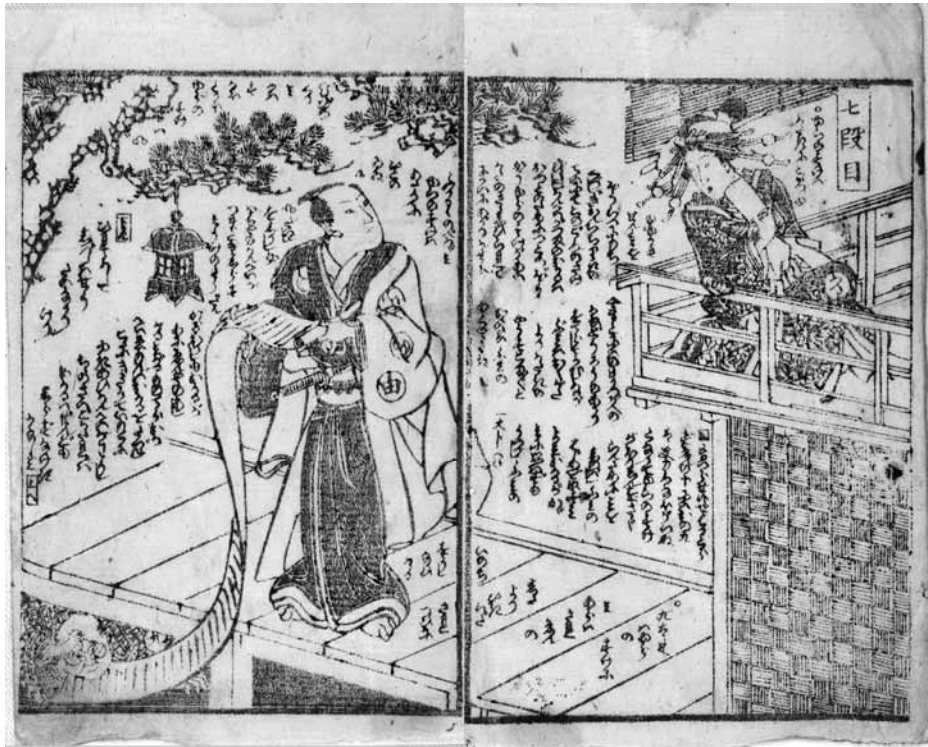
千崎弥五郎
早野勘平



六段目

〔六段目〕○お軽が父野崎の百姓与一兵衛ハ「婿勘平が忠義を立ん」と
 娘お軽を祇園一力に売代做し、五十両の金を懐中にして帰る途中、
 お九太夫か伴定九郎に討れ、金を奪はれたりしかど、勘平が筒先に
 定九郎も又命を落しぬ。斯で勘平ハ我家へ戻るに、「文字屋才兵衛
 お軽を駕籠に打載せて昇出す棒端捉へて様子を聞」扱ハ昨夜誤つて
 旅人を撃殺せしと思ひしハ舅にて、金ハ正しく女房の身代にてあり
 けるか」と呆れ果たるばかりなり。」

〔六段目〕勘平ハ一途に「舅」を撃止し「と」思ひたる折しも、か「く
 兵衛、めつ」ほう弥八、種「が島の六」与一兵衛か死骸を戸板に載せ
 持来れば婆ハ悲しみ狂気の如く、勘平が思案の躰を見るよりも、「扱
 こそ婿の仕業」と勘平にしがみ付き、怒み罵る折しもあれ、千崎弥
 五郎、原郷右衛門の兩人入来り「昨夜弥五郎に渡せし金を由良之介
 に渡せしところ、主君の大事に在合はさぬ勘平が「調」のへし金
 「石塔料にハ為難し」との立腹故戻すなり」と聞より、勘平腹搔切り、
 鶯の嘴の一部始終語れば、兩人これを聞、舅を討しハ定九郎。「そ
 れは、しかく斯様ふかく」も連判帖に「加へけ」れば、勘平嬉し
 く、がつくりと其俣息ハ絶にけり。」



七段目

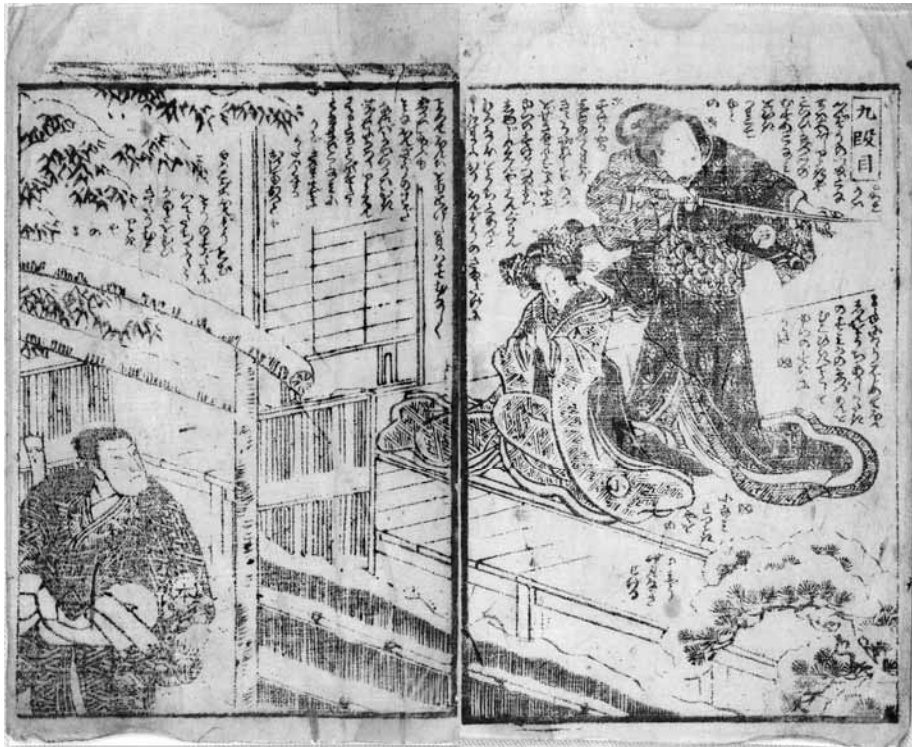
七段目 ○由良之介ハ「敵に心許させん」と身を放埒に持崩し、祇園
 一力の亭にて、此頃の酒浸し。勘平が妻のお軽ハ、夫の為に勤奉公。
 由良之介が相方の酒強られて二階に上り、風に吹る、延鏡。
 由良のすけ 辺りに人の居ぬ間と、庭の松枝の金燈籠の明りを照し読む
 由良之介ハ、奥方より敵の様子。細々と女の文の後や先、参らせ候で
 長文ハ、縁の下にハ斧九太夫、師直が犬と成りて由良の助が本心を
 探らん為に身を忍ばし、文の冒頭を盗み読み。お軽が鏡に思はずも
 映りし文の一大事、驚愕り見交す顔と顔。由良之介ハ、大事を知し女
 ハ早野勘平が妻とも知す、身請の相談。斯る折しも、お軽が兄塩治の
 足軽身軽者、寺岡平右衛門ハ、お軽を尋ね此処に來りて妹に行会ひ、
 勘平が横死、父の最期語れば、お軽ハ前後も知す嘆き悲しみ、平伏
 て些時ハ正体無りけり。
 ○九太夫ハ由良之介に見顯され、縁の下より引出され遂に命を失ひ
 ける。」



八段目

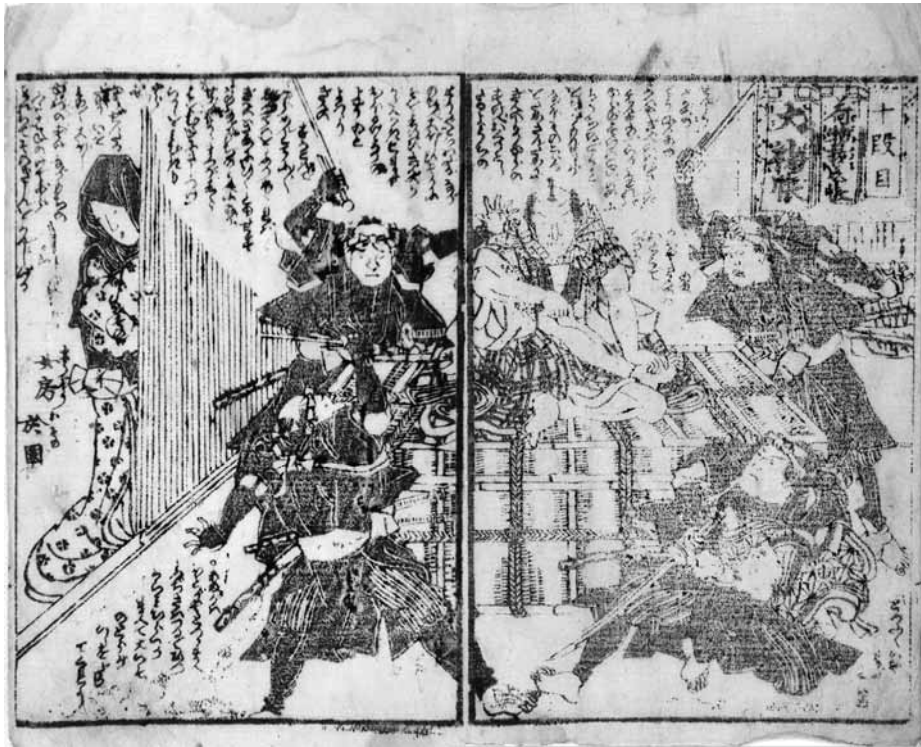
八段目 道行旅路嫁入

へ浮世とハ誰が言初て飛鳥川、淵も知行も瀬と変り、寄辺も浪の下人に、結ぶ塩冶の誤りハ、恋の枷杭加古川の、娘小浪の許嫁、結納も取ず其俵に、振捨られし物想ひ、母の思ひハ山科の、婿の力弥を力にて、住処へ押して嫁人も、世に有り無しの義理遠慮、腰元連ず乗物も止て親子の二人連。都の空に志す。中「畧」母が走れば娘も走り、空の霞に笠覆ひ、船路の友の後や先、庄野亀山せきとむる、伊勢と吾妻の別れ道、駅路の鈴の鈴鹿越、間の土山雨が降る、水口の葉に言囉す、石部石場で大石や、小石拾ふて我夫と、撫つ擦りつ手に据て、やがて大津や三井寺の麓を越て山科へ、程無き里へ三三急ぎ行く。」



九段目

九段目 ○加古川本蔵の妻戸奈瀬ハ、大星力弥と許嫁の娘小浪を引連
 て、由良之介か山科の隠家に來り「是非嫁入をさせせん」と乞にぞ、
 由良之介が妻お石「主人塩冶判官、師直を討留んとし給ふ折、本蔵
 の妨げに廻て本意をも遂げ給はず。虚しく自害し給ふも、みな本蔵
 の業なれば、嫁入ハおき、倅にかはり離縁さるゝ」との言葉を聞、
 戸奈瀬ハ小浪に「敵既に討ん」とする折しも、夫加古川本蔵、虚無僧
 の姿に出立、二人が跡を追來り、婿力弥の手に掛り、初めて本心を
 打明し、敵の住処の絵図面を婿引手として由良之介に渡し、小浪と
 力弥を祝言なさせける。」¹⁰



十段目 泉州堺の「とにん」天河屋義平ハ「久敷」塩治の出入「

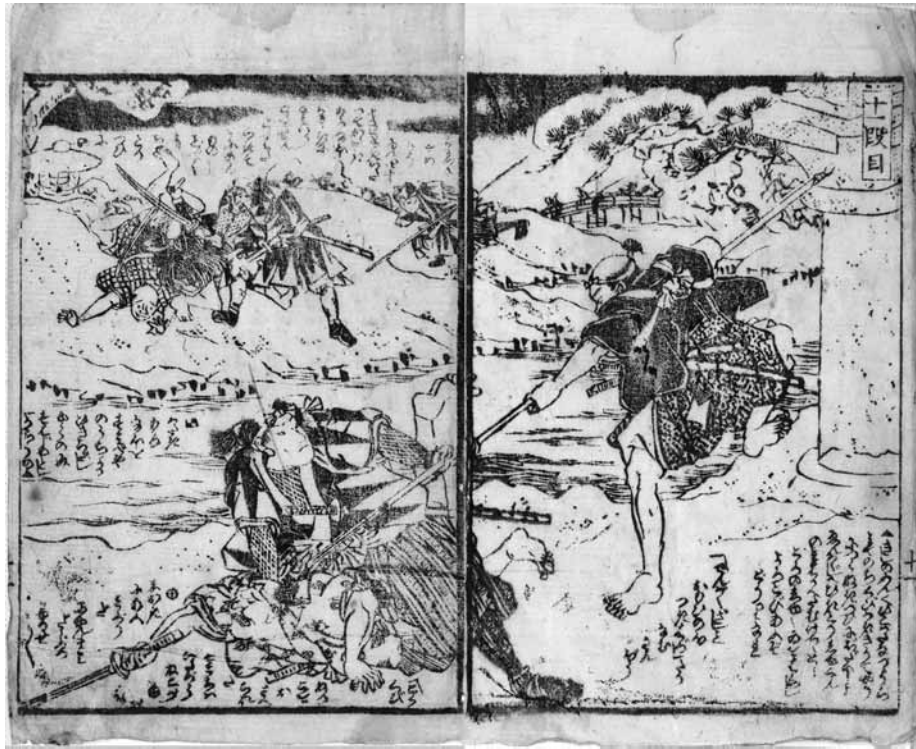
」れバ、由良之介ハ「」に夜討の道具を注文せしが、猶其心を試ん為に、「義平より由良之介へ送り」としたる夜討の道具を入たる長持へ、大星竊に身を忍び、義平か方へ搔込せ、「おほやけ」よりの上意と呼はり、義平を囲んで「絡ん」と、丁々十手を振上れば、義平ハ更に微動もせず、彼長持の上に在り。伴由松が白刃を胸に差付らるゝを見向も遣ず「悠然たる魂を」大星由良之介、長持の蓋撥除て現れ出で、其義心を感じける。

○天河保土ヶ谷戸塚まへ、藤沢つるて引絡み、平塚まへて大磯の虎が石を抱して呉う。

「天河屋義平ハ男で御座る」

「捕たく、いやまだ捕ぬ」

女房 於園



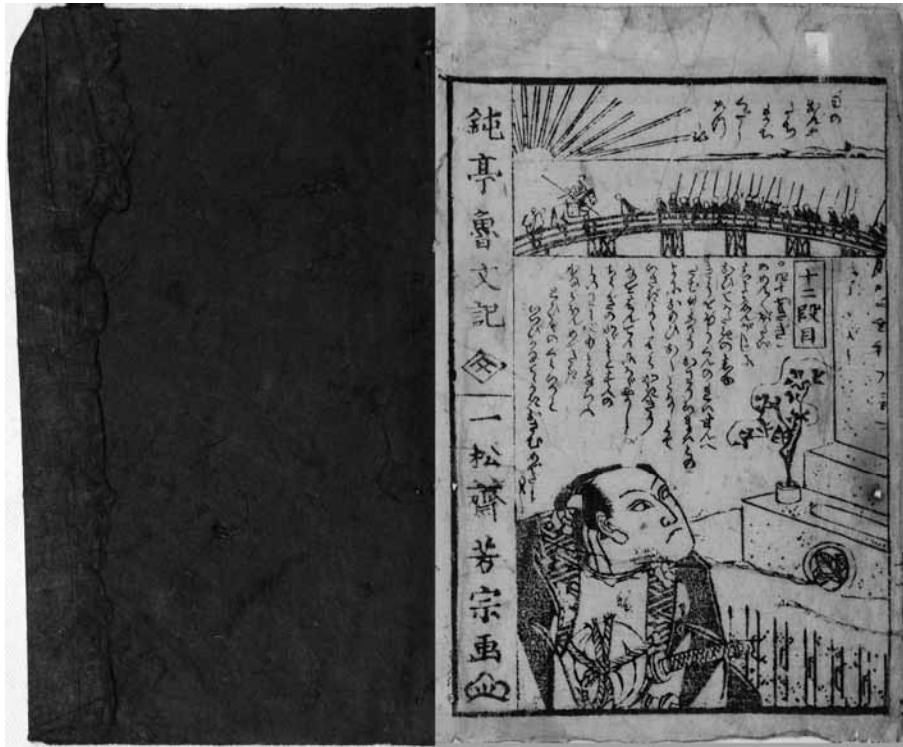
十一段目

「十一段目」○塩治の浪人四十七義士、時至つて敵師直が屋敷に込入り、此処を先途と働きて、屋にある者悉く討取り、遂に敵師直を炭部屋の中より引出し、由良之介を始めとし、家中の義士の面々、一刀づつ、怨みて後、首掻切り手鎚に貫き、遂に菩提所円岳寺へ引取り、主君の御墓へ手向つ、年来の宿意を晴し、喜び合ふぞ道理なれ。

「斯う首根を押へられた。此にハ痛かる。猫が仕置に合ふ身振だ。南無阿弥陀仏」

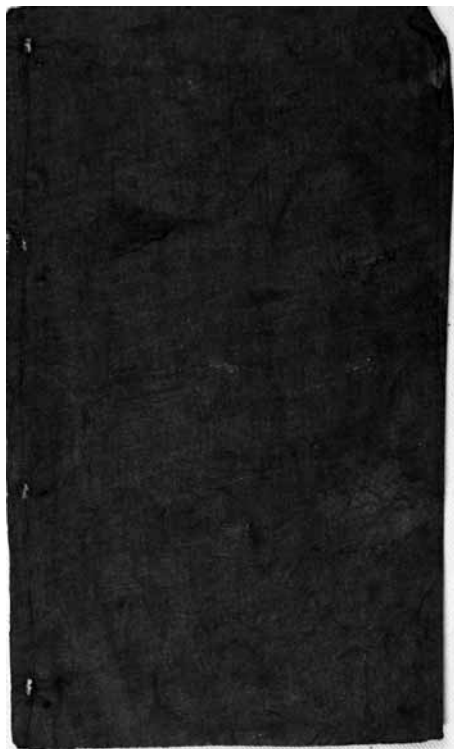
「許せ〜」

「田楽刺と思ひの外、突外したか、南無三宝」^{12オ}



十二段目

後ろ表紙裏



後ろ表紙

鈍亭魯文記 一松齋芳宗画印

12ウ

「日の出んやたちまちくだしはつ氷」

十二段目 ○四十七騎義士の面々、菩提所円岳寺に於て、敵の首級を亡君の靈前へ手向け、回向終り、「今ハ此世に思ひ置く事なし」とて、潔く腹掻切り、名を万天に輝かし、忠義の龜鑑と末の世の童子も見做ふ假名手本。目出度き問屋の蔵入と、祝ひ奏て書納む。目出度し〜